

御家人浮世絵師と明治時代

「浮世絵」と聞けば、江戸時代のものだと思われる方が多いのではないのでしょうか。しかし、実際には維新を迎え、明治時代になっても浮世絵はつくり続けられていました。

草津市の所蔵する中神コレクションから、明治期を代表する浮世絵師の「豊原周延^{ちかのぶ}」の作品を紹介します。

今回取りあげる「東錦昼夜競」は50枚もの連作で、様々な歴史故事を描いています。この浮世絵の主人公・祇王は、平清盛の寵愛を受けた白拍子(歌舞の一種を男装で舞う女性)でした。豊原周延がこの様な歴史故事を描くには、その出自に関係していたように考えられます。周延は本名を橋本直義といい、元は幕府の御家人で、明治維新のころも彰義隊^{しょうぎたい}として上野戦争や箱館戦争に参加していました。歌川国芳、歌川国貞、豊原国周^{くにちか}と三人に師事しており、御家人時代に見聞きした江戸城内の風俗を題材にしたシリーズが有名ですが、西洋衣装を身に纏^{まと}った美人画も得意としていました。他には物語や芝居を題材にしたものがあります。周延は、西洋文明の様子を浮世絵に描きつつも、元は御家人という経歴を考えると、古き良き時代に思いを馳せ、このような作品を残したのかもしれない。



ちかのぶ あずまにしきちゅうやくらべ ぎおう ぎによ
豊原周延「東錦昼夜競 祇王・祇女」 中神コレクション明治19年